

学びと共に

安 田 勉 (子ども学科教授)

1 はじめに

紀要編集委員会より「教育の現在と未来」と題する特集を企画するにあたり、原稿の依頼を受けた。長い間、教育・研究活動に携わっているが、お役に立てるような内容のものを執筆できるかどうかは何とも心もとない。しかし、せっかく頂いた機会なので、筆者の今までの研究での経験・学びをもとに取り組んでいる講義の現状を紹介しながら、よりよい講義の在り方について考えてみたいと思う。

2 研究と講義

筆者は子どもや家族への心理臨床活動において大切にしていることがある。そのことは講義をする際の取り組み姿勢や学生へ関わりにおいても大切にしている。

それは、Solution-Focused Approach のクライアントに対する基本的な考え方である。具体的には、「クライアントは彼らの問題解決のためのリソース（資源・資質）を持っている」や「クライアントが彼らの問題解決のためのエキスパート（専門家）である」という考えである。

心理療法に未来志向の考えを持ち込んだ、精神科医・催眠療法家の M・エリクソンは「人々は、元来変えようのない過去についての啓発を得ようと思って、心理療法を受けに来るのではない。今に対して不満があり、より良き未来を得たいと思って来るのである」と述べながら、クライアントの中にある力に目を向けた。すなわち、彼は、過去を振り返り、その人の問題の起源とか学習された制限クライアントの問題の起源とか学習された制限を見つめるのではなく、その人の中に今あるもの、もしかすると将来的に伸びて使えるもの、そうした解決法や力に目を向けたのである。

いずれにしても、クライアントは問題や症状を持って相談に来るわけであるが、この考え方に基づいたアプローチが、クライアントの問題や症状を消失したり、軽減するための意欲や行動を生んでいることを実感している。

このことを学生の学びに敷衍すれば、学生は学ぶために来ているのであり、わからないことを指摘されたり、注意されるために来ているのではないということ。そして、学生は、学ぶ力、学ぼうとする力（リソース）を十分持っているということ、そして学生は学びのエキスパートであるということである。

したがって、この力を発揮してもらうための条件づくりや、学ぶ力を発揮するための学生との共同作業が教育であり、その具体的な展開の一つが講義という取り組みになる。

わからないことがあって当たり前である。そのことを前提として、保育士や教師を目指す意欲を大切にしながら、学生と共に講義を作り上げるのが筆者の役割になる。

3 演習や講義を通しての学び

わからないことを大事にし、新たな学びを支援するにはどうしたらよいか。内田（2007）はわからないことへの気づき、わからないことが気になるようにしていくこと（知らないことの不全感を作ること）が学びの重要なきっかけになることを指摘している。

演習や講義を通してわからないことに気づいてもらい、わからないことを自己の学びのきっかけにしていくためには、学びの方法論が必要になってくる。筆者は演習で、資料を利用する際は、わからない単語にマーカーで印を付けてもらうことにしている。そのわからない単語を一つ一つ調べたり（個人や共同作業で）、説明・確認したりしながら、次に進めている。わからない単語をわかるようにしていくこと（内田はこのことを「穴埋め」と言っている）が「学んだ感」を作り、次への学習に繋がっているようである。時間のかかることであるが、地道にやっていくしかない。わかることが増えていった時に、今までとは違ったより広い認識ができるようになることが見られる。

4 終わりに

以上、筆者の心理臨床実践の理念とそれを教育へ敷衍した考えやその考えにもとづいた演習や講義の一端を紹介した。上述したことは「あたりまえで、誰でもしていることですよ」と言われそうであるが、これが筆者の現状である。まだまだ取り組むべき課題が多い。残された教員としての生活もわずかである。最後まで、学生にとっての有意義な学びに、どのように寄与できるかを模索しながら取り組みたいと思う。

参考文献

- 1) 高等教育研究会「大学を学ぶ」青木書店、1996
- 2) 浅野誠「授業のワザ一挙公開」大月書店、2002
- 3) 船曳建夫「大学のエスノグラフィ」有斐閣、2005
- 4) 内田樹「下流志向」講談社、2007
- 5) 二宮厚美「発達保障と教育・福祉労働」全障研出版部、2005
- 6) W・H・オハンロン「ミルトンエリクソン入門」金剛出版、1996

大学は、人づくり、の場になりうるか

木村 清（現代社会学科教授）

今回、大学以外のフィールドでの経験のある者の立場から教育について何か書くようにという依頼を受けた。そこで本稿では、私の製造業勤務の経験を振り返りながら、教育についての雑感を綴ってみたい。

私は、大学院修了後約10年間、電気部品の製造業に勤務していた。私の勤務していた事業所は、当時従業員約2,000名、毎月の生産額は約40億円という規模の工場であった。平均の製品単価は100円にも満たないので、毎月数千万個の製品を作り続ける現場であったということになる。

このような現場では、原材料や製造のコストと品質（不良率）が全体の利益を大きく左右する。たとえば、製品のコストの1円の差が、数千万円の利益の違いにつながり、品質が安定しない製造ラインは、一刻も早く問題を解決しないと成らない。そこで、各現場において自主的にコスト削減や品質向上（不良率低減）、あるいはまた業務効率向上の取り組みを日常的に行